

新潟の六斎市（定期市）

講 師：国土技術政策総合研究所 管理調整部長
吉田 秀樹

国総研の吉田です。毎月、ウォーターフロント協会で「海と船が見える坂道」について書いています。坂道のことはウォーターフロント協会「みなとまちづくり通信」を読んでいただくとして、今回は新潟の六斎市のお話をすることとしました。資料はパワーポイント、新潟の定期市をまとめた紙1枚、夏の国総研と港空研の一般公開のちらし、それから一般公開の時コーヒブレイクに横須賀の「海と船が見える坂道」のマップを置いておこうかなと思っています。



では、新潟の六斎市（定期市）についてお話しします。みなさん新潟に行かれた方はたくさんおられると思いますが、まずは表紙の写真の説明をさせていただきます。一番最初の左側が柳都大橋から

見た河口のほうで朱鷺メッセが見えます。これを見てもわかりますように新潟市内は信濃川と阿賀野川の大きな川が流れていて、新潟というのは内陸水運と沿岸海運の拠点として発展した湊町です。下の写真は新潟越後平野の町にはこのような川が流れているところもあります。昔の豊栄市の葛塚というところで現在も六斎市が開かれているのですが、そこを流れている新井郷川という川があります。昔は蒸気船が明治、大正期に走っていたという看板もあります。これはまた後ほど説明いたしますが、室町、江戸期には町の拠点にこのような市場がありました。基本的に道路のところにテントを張って野菜とかものを売る市が立っていたということです。これはよく輪島の朝市とか呼子の朝市と

かいいますが、ここは毎日立つわけじゃなくて、のちほど説明いたしますが一六の市とか二六の市とか二八に市とか四九の市とか、いってみればひと月 6 回やるということで、実際の意味は違うのですが六斎市ということになっています。本当は室町、江戸時代に始まって、江戸後期、明治のころに全国にできたものなのですが、現在となっては、限られた場所、例えば新潟とか秋田に残っています。そして今だ非常に盛んです。それを港との関係で説明できないかなということでまとめてあります。

お話しする内容

- ・ 1. 私の経歴
- ・ 2. 六斎市に興味を持ったきっかけ
- ・ 3. 市場とは？六斎市とは？
- ・ 4. 過去の市場の研究
- ・ 5. 全国の六斎市の動向
- ・ 6. 新潟の六斎市と内陸水運
- ・ 7. 地域振興としての六斎市
- ・ 8. まとめ

National Institute for Land and Infrastructure Management 2

今日は話をさせていただく内容として 8 つ、まず、なぜ私がこんな話をするんだということが疑問だと思いますのでいままでの経歴、どうして六斎市ということになったのかということが 2 番目。ちょっと真面目に市場とか六斎市とはどういうもので、過去いろいろなところで研究されているのがどういふものがあるのかという

ことを 3、4 番目。そして六斎市について全国的にどこに分布するのかインターネットなどで調べたのが 5 番目、実際の新潟の六斎市の紹介をするのが 6 番目

ということになっております。詳しくお話しするのは 6 番目ということになります。もちろん新潟は内陸水運と沿岸海運の拠点なのですが、そういう拠点に六斎市が多い。それとの関係。7 番目に最近六斎市と名乗って全国でまちおこしをやっているところもあるのですが、それに

1. 私の経歴

- いろいろな事務所・地方を経験した、興味を持った、
- 港湾技術研究所企画課(H9) →?
- 敦賀港湾工事事務所(H11) →町並み、おろしそば、カツ丼
- 横須賀市役所(H13) →近代化遺産、艦船、要塞
横須賀フランスパン
- 近畿地方整備局(神戸)(H15) →軽登山、閘門
- 下関港湾空港技術調査事務所(H16) →坂、島巡り・まち巡り
- 新潟港湾・空港整備事務所(H19) →小路、みなとまち、水運、運河・川、**市場(六斎市)**
- SCOPE(東京)(H21) →人脈、新潟サポーター、新潟塾
- 北九州港湾・空港整備事務所(H23) →人脈、**海と船が見える坂道**、角うち
- 国総研(久里浜)(H24) →**海と船が見える坂道**

National Institute for Land and Infrastructure Management 3

対するコメントとそれでは新潟でこれからどうしたらいいんでしょうかということです。そして最後にまとめということで進めていきたいと思います。

なぜこのようなことを私がやるのかということで、これは2年ぐらい前の8月にウォーターフロント協会の懸賞論文募集があったときに作った私の略歴をまとめたものがあります。全国いろいろなところをぐるぐるまわっているということです。もともとは福井出身で、目立った所をいうと17年前に港研の企画課。ここで横須賀に住んだというところがあります。平成11年に自分の地元である敦賀に行った。そこで何に興味を持ったかというところと三国の町並みとかそういうもの、福井はおろしそばがうまいのでおろしそばのマップとか福井のソウルフードのソースかつ井とかを食べあるきました。それから4年して再び横須賀へ立ち戻ってきたということです。実際平成9年のときは大蔵省の室の木宿舎、平成13年は関東地整の室の木宿舎というところで2年もたたずに出戻りで戻ってきました。それで平成15年には横須賀に定住したということになります。横須賀ではやはり歴史的にはどうなのか、港はどうなのか、といろいろ考えてすぐにやっぱり造船所とか海軍基地とか近代遺産が多い。当然近くには自衛隊の宿舎もありますし、自衛官も多い。第三海堡の工事もやっていたこともあり、要塞というのは重要だなと思いました。スーパーに行くと怪しげなフランスパン（横須賀独特のソフトフランスパン）を売っているのをこれを調べようと思い立ちました。ここから北前船航路に沿って全国をぐるぐる回り始めました。まず、北前船の出発地は神戸ということで近畿地整に行ったときに、六甲山、六甲縦走とかそんな感じで、雨が降らなければ登るということで天気を見計らって登る軽登山を始めました。山からは海や港がよく見えました。それから運河もたくさんあったのでこういうものにも興味を持ちました。それから瀬戸内海をずっと北前船で下っていくと下関ということで、次の年に下関に異動しました。町のうしろは山になっているので石垣、坂が結構多かった。なおかつ、下関では技術調査事務所長という立場もあったので、九州管内を回ることができました。九州のいろいろな港や町をめぐるしました。一方下関というのは瀬戸内海も近いので瀬戸内海をいろいろ回って町めぐり、みなとめぐりを兼ねました。下関に3年勤務し、ついに北前船航路が日本海側に入ってたどり着いたところが新潟です。新潟は勤務は2回目、昭和62～3年ぐらいに新潟におりまして20年ぶりに新潟に来ました。敦賀にいたときも新潟に来ることがあったので、10年おきぐらいに新潟に来たということで、若い時、中ぐらいの時、そろそろ年を取りだした時というそれぞれ3つの世代の感覚で新潟に行くことができました。そのときにはどういうところが面白かったかということでは、ひとつは港町が、信濃川、阿賀野川の水運の拠点であったということ、それから新潟の町の中は堀がたくさんあったということです。それに付随して、堀と川を結

ぶ間に新潟小路巡りというのが始まりました。じつはこの時にいろいろ歩いていると六斎市があるなということに気づいて興味を持ったということでございます。次はSCOPEに出向していた時代で、これは東京ですし、雑誌作りや講演会を通しての人脈が重要でした。平成23年もう北前船航路は終わりかなと思っていましたが、なんと2周目に入ってしまったので、北九州に行くことになりました。このときには、今連載中の「海と船が見える坂道」を始めたということ、最近横須賀にも立ち飲みがありますが、北九州で「角打ち」というものを見つけてしまいました。現在国総研というところでこれをまとめてマップにしようかなと思っています。

私の経歴からたどりついた「みなとまちづくり」とは

- ・ 元気な中高年
- ・ ふるさと・アイデンティティ
- ・ 歴史・文化
- ・ 美しい日本・ほこり
- ・ その中で東日本大震災(風景、文化、遺産の喪失、強制移転)

↓

■ 歴史文化を感じさせほっとする「やすらぎ」の水辺

それを支える要素として、

別途連載中

北九州、横須賀では??「海と船が見える坂道」

新潟では??「市場・定期市・六斎市」

今回のお話はこのテーマ

いろいろ経歴や熱中することがありましたが、今回お話するのは新潟の六斎市です。これも2年ぐらい前にみなとまちづくりとはなにかを考えてみました。これからのみなとまちというのは若い人もそうだけれど、元気な中高年が多いのでそういう人が対象だろう。東日本大地震とかあって、

故郷とかアイデンティティとかそういうものを皆さん求めるようになっている。そして美しい日本・誇りがあったらいいのかなというところで、個人的には歴史文化を感じさせて

2. 六斎市に興味を持ったきっかけ

- ・ 新潟での生活。→山歩き、まち巡り、川巡り
- ・ 新潟には市場が多い。→市内の市場。
- ・ 川が発達。在郷町も。→内陸水運だった。
- ・ いろんな町に市場。→六斎市。
- ・ 最近のテレビ。→地域・旅番組→必ず市場。

↓

- ・ 六斎市を調べよう。地域振興に役立たないか？

- ・ 所長時代みなとの情報誌「越佐みなと通信」。→連載記事。
- ・ SCOPE時代の調査。→閘門・内陸水運・六斎市。
- ・ 土木学会年次講演会で発表。

歴史文化を感じさせてホッとする「やすらぎ」の水辺作りかなということでした。それなりに地元ではこういうものがあるんだよ、ということで自慢できるものはないのかなということで、北九州、横須賀では「海と船が見える坂道」を連載中。新潟で

はどうかのかなということで、やはり市場（六斎市）だろうと思ってこのテーマで話すことになったということでもあります。

新潟でも山歩き、街歩き、川めぐりというのをやっけていまして、新潟のまちなかには六斎市ではなくて結構市場が多い。それから新潟は昔からの内陸水運が盛んである。六斎市という本もある。また、最近、テレビで旅番組を見ると必ず市場が出てくるかと思ひます。ときどき六斎市というのが出てきますがそれで、新潟にいるときは六斎市を調べようと、それで地域振興・みなとまちづくりに役立てることができればと思ったところす。実際、それでどのようなことを行ったかということですが、新潟の所長の時にみなとの情報誌ということで「越佐みなと通信」というのを途中から始めて、そこで「六斎市」の連載を始めました。自分が実際行ったりして、職員が取材に行ったりしてデータを集められるのではないかなというのがひとつ、それから SCOPE 出向時に、今の我が国の港湾行政で遅れている内陸水運に関し、技術的なこともやらなくてはいいかなと思ひて閘門とか内陸水運のことも調べました。ただそれだけではちょっと面白くないので、新潟時代、六斎市を調べ残したところもあり、ちょっと調べようかなということで調べました。せつかく調べましたし、北九州にいたときに、土木学会年次講演会が「坂の上の雲」で横須賀とつながりの深い



い松山であるということなので、いい機会なのでそこで「六斎市」を発表しようということでもめました。それが土台になって今回の話の内容になっています。

新潟での生活を紹介します。上右の写真ですが新潟に

大倉山というのがあります。これは港湾空港技術振興会のときに松原審議官が菅名岳という日本酒の話をしていましたが、菅名岳の隣の山で縦走でいけるとなりの写真は、新潟港でNPOみなとクラブと直轄事務所がいつ

しよに「新潟みなとまち歴史ウォーク」を現在まで5～6年ぐらいやっているんですが、ここでいろいろ新潟の町の中を歩いています。新潟下町というみなとまちでこういう祭りをやっています。左上は新潟西港にある通船川と新潟西港を結ぶ閘門のところですか。閘門を開けて水がダーッと入り込むというよう写真です。右下の写真は、新潟西港の中で輸入木材を船から水面落としして、筏を組んで、閘門を通過して通船川にある貯木場に持っていくということになります。港内と通船川の間は2mぐらい水位に差があるので、その間を閘門で調節しています。通船川というのは昔の阿賀野川でして片方は新潟港と信濃川に繋がっておりますし、もう片一方は今の阿賀野川に繋がるということでございます。下真ん中の写真、出口をずーっといくと向こうにあるのが阿賀野川、ここにも閘門があります。私たちの歴史ツアーでは阿賀野川から新潟西港まで舟くだりをしてします。この左下写真が大河津分水でして、最近竣工しました。実は大河津分水が出来て放水路にするまでは越後平野は内陸水運が盛んだったのですが、分水によって河川水量を減らすことになって内陸水運がさびれたということです。これは桜の時期、花魁道中をやるところで、後ろに見えるのが弥彦山、越後平野があつて、いろいろな六斎市が開かれています。



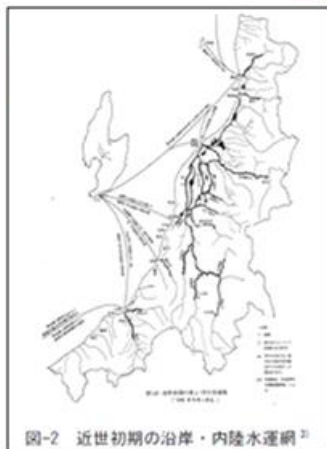
実際、新潟市内が市場が多いということ、白山浦にいた方だとよく白山市場に行って懇親会のつまみの買い出しに行ったかと思います。毎日開いている市場がたくさんあるということでございます。白山市場、山の下市場、それから古町から繋がっている本町市場とい

った毎日立つ市場があります。この沼垂市場というところは六斎市的なところもある。ということで新潟市内には市場というのは身近にあるということで、県内にもあるに違いないということで私は興味を持ちました。

川が発達。在郷町も。→内陸水運だった。



近世初期の沿岸・内陸水運網
①佐渡、沿岸航路が発達。
②信濃川、阿賀野川、関川、荒川、加治川等河川に内陸水運網が発達



出典: 小村「図説新潟県の歴史」

National Institute for Land and Infrastructure Management 8

それから川が発達したということで、右側図、近世初期の沿岸内陸水運網ということで佐渡との関係、沿岸海運、内陸水運という形で、信濃川水系、阿賀野川水系、加治川、荒川、関川と太い線のところが船が定期便のようにして通った船道ということで明治、大正まではこれが盛んでした。こういうところに市場が立ってくるということです。実際これはのちほど説明いたしますが、左下写真のように、阿賀野川付近の津川というところでは川の中には今でもこういう形で船着き場があります。

いろんな町に市場。→六斎市。



新潟県内の定期市分布
全体65カ所
①新潟市内 8カ所
②下越地方 31カ所
③中越地方 12カ所
④上越地方 5カ所
⑤佐渡地方 9カ所



出典: 石原「定期市の研究」

National Institute for Land and Infrastructure Management 9

いろいろな町に市場があるということで新潟県全体では 65 カ所ぐらい定期市があります。

所長時代みなとの情報誌「越佐みなと通信」。 →連載記事。(計30回)

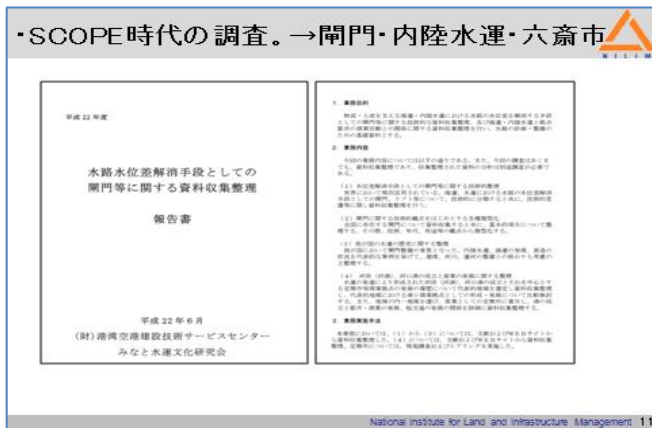
- ・新潟の港に関する情報を収集し関係者に配布。
- ・毎月1回。



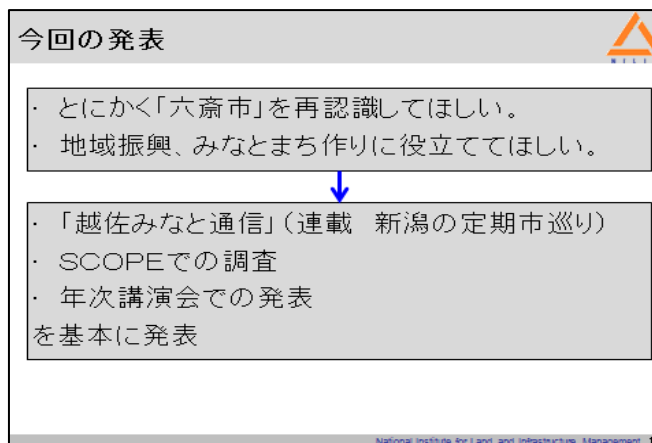
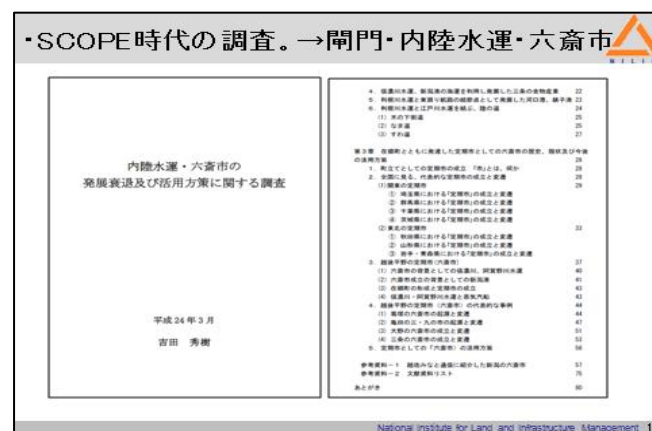
「越佐みなと通信」第9号 (H20.5発行)

National Institute for Land and Infrastructure Management 10

みなさん御存知かと思いますが「越佐みなと通信」は、平成 20 年 5 月から毎月発刊していて、今 80 何号まで続いている、あと 1 年ちょっとすると 100 号です。右側が 1 ページ目



として左側が 4 ページ目というような袋とじの一番最後のページ（4 ページ目）なのですが、新潟の定期市ということで第 1 号から連載で 30 回掲載しました。作る時に、情報誌といっても毎回ネタを探すのも大変だし、読者も面白くないだろうから、連載が必要だろうと思って「六斎市」ということにしたわけです。これが北九州では情報誌「直轄北九港」に坂道連載ということになりますし、昔、敦賀にいた時は、広報誌「湊若越」ではみなとまち歴史連載というのを三国と敦賀でやっていました。六斎市については、この 30 回の連載が 30 カ所分のデータとして集まったということになります。



これは SCOPE のときに行った調査で「水路水位差解消手段としての閘門等に関する資料収集整理」というタイトルがついていますが、水位差解消手段としての閘門の話、(3)として我が国の水運の歴史に関する整理、それから河岸の話。河岸の話のところに入六斎市を入れています。その中で内陸水運と六斎市のところをまとめました。せっかくまとめたのだから一昨年、土木学会年次講演会で松山に行って発表したということになります。この中を基本にお話をさせていただきます。

3. 市場とは？六斎市とは？

市場の起源？

- ・「市」の起源「斎」（いつき）神仏の祭祀 その場所が「市庭」→「市場」
- ・市は神仏と交流できる場所と時期
- ・河原、村・国の境界、神社仏閣



六斎市とは？

- ・寺社領の境内など公共的な空間が「市」の場として利用され、町立ての要素の一つとなり、三斎市、六斎市等として発達。
- ・月に6回（1と6、2と7、3と8といった組合せ）行われる定期市を「六斎市」（ろくさいいち）。室町時代ころから。
- （参考）六斎日→鬼神が勢力を得て人命を奪う凶日。毎月陰暦8,14,15,23,29,30

市神？

- ・市場の守護神

〔出典編集：福田仁史、地域の六斎市から歴史をたどる 新潟港湾 空港整備事務所 新潟港ビデオ上映会 8008〕

National Institute for Land and Infrastructure Management 15

市場、六斎市とは何か？起源は？下のほうにちょっと書いてありますが、新潟の事務所時代にビデオ上映会を開催し、そのとき市役所の福田さんという人に六斎市の歴史をたどる話をちょっとしてもらいました。そのときの受け売りですが、市場の起源というのは「斎」（いつき）

神仏の祭祀でその場所が「市庭」それが変わって「市場」となった。市は神仏と交流できる場所と時期ということで、河原、村・国の境界、神社仏閣ということになる。六斎市というものはどういうものなのかというと、寺社領の境内など公共的な空間が「市」の場として利用され、町立ての要素となり、三斎市、六斎市等として発達したものです。月に6回ということで一六、二七、三八、という組み合わせの六斎市として商業が発達し、戦国大名とか守護とかが経済発展させる在郷町を作り始めたところから発達してきました。六斎日というのはなんなのかということですが、鬼神が勢力を得て人命を奪う凶日というふうになっていますが、この日は昔は全然寝ないでいる。凶日とはいいいながらこれは

8,14,15,23,29,30日ですが、これがいつのまにか6回開かれる六斎市ということになりました。市場のあるところには市神があるところもあります。

過去どんな市場に関する研究がなされているかということをし調べました。市場についての研究と

4. 過去の市場の研究

・ 市場に関する研究

- ・ 森本剣太郎 2010朝市の現状基礎分析－沿岸域の地域活性化に向けて－ 国総研資料559 など

・ 定期市に関する研究

- ・ 樋口 節夫 1977 定期市
- ・ 石原 潤 1987 定期市の研究
- ・ 中島 義一 1975 岩手・青森両県交界地方の定期市 駒澤地理 など

・ 新潟六斎市に関する研究

- ・ 新潟県教育委員会 1977 越後・佐渡の定期市
- ・ 新潟日報事業社 1999 にいがた 市が立つ町
- ・ 石原 潤 1995 越後の定期市（北陸道の景観と変貌の一節） など

・ 新潟六斎市に関する講演

- ・ 新潟市 2007 81万人の港町・新潟
- ・ 福田仁史 2008 地域の六斎市の歴史をたどる 新潟港ビデオ上映会 新潟港湾

National Institute for Land and Infrastructure Management 16

いうことを調べますと、実は国総研資料でその研究がなされています。「2010年 朝市の現状基礎分析—沿岸域の地域活性化に向けて—」ということで、朝市の研究がなされている。この森本さんというのは熊本大学のほうに行かれている方です。「定期市に関する研究」ということでは石原さんという方がけっこう詳しく研究しておられます。それから中島さんの研究ということで、だいたい 1970 年～1980 年に研究されているのが多いようです。それから新潟の六斎市に関しましては、石原さんというかたもザクッと書いています。非常に詳しく書いているのが、県の教育委員会、1977 年「越後・佐渡の定期市」ということで一度調べている。その時に大正時代のデータとかを含めてデータとしている。それからガイドマップ的にまとめているということでは新潟日報に「市が立つ町」があります。今回資料として、教育委員会の書いているものと新潟日報を中心に表としてまとめて、尚且つ新潟港時代に実際調べたものをまとめています。講演については新潟市が政令指定都市になったときの「みなとまち新潟」の講演の中でちょっとした話があった、新潟港湾の新潟港ビデオ上映会の中で講演されたということがありまして、断片的にやられているというのが多く、かつ、最近の調査がないということで六斎市についてまとめるのが必要かなということで、やや危機感を持っているところでございます。

5. 全国の六斎市の動向

- 調査方法
→インターネット検索
文献調査



図-3 全国の主要な定都市・市郡の分布（中島、1977）
〔出典：森本、朝市の現状基礎分析〕

National Institute for Land and Infrastructure Management 17

全国の六斎市の動向ということでインターネットで調べた結果をご紹介します。これはさきほど国総研資料で書いた森本さんの中にあっただんですが、結構全国に定期市の分布があるということなんです。インターネットで調べても定期市、朝市も全部含まれていますが、なかなかヒットし

てきません。いまでも定期市として残っているのは、岩手と青森の境、秋田、新潟、千葉、それから三河地域というぐらいしかインターネットでは出てきません。

東北の定期市

- ・青森・岩手→三斉市、現在もあり。
- ・山形→過去六斉市。現在なし。



第1章 政治経済	第2章 社会生活と文化	第3章 地理
1. 政治	1. 社会生活	1. 地理概論
2. 経済	2. 文化	2. 自然地理
3. 政治経済	3. 社会生活と文化	3. 人文地理
4. 政治	4. 文化	4. 自然地理
5. 経済	5. 社会生活と文化	5. 人文地理
6. 政治経済	6. 文化	6. 自然地理
7. 政治	7. 社会生活と文化	7. 人文地理
8. 経済	8. 文化	8. 自然地理
9. 政治経済	9. 社会生活と文化	9. 人文地理
10. 政治	10. 文化	10. 自然地理
11. 経済	11. 社会生活と文化	11. 人文地理
12. 政治経済	12. 文化	12. 自然地理
13. 政治	13. 社会生活と文化	13. 人文地理
14. 経済	14. 文化	14. 自然地理
15. 政治経済	15. 社会生活と文化	15. 人文地理
16. 政治	16. 文化	16. 自然地理
17. 経済	17. 社会生活と文化	17. 人文地理
18. 政治経済	18. 文化	18. 自然地理
19. 政治	19. 社会生活と文化	19. 人文地理
20. 経済	20. 文化	20. 自然地理
21. 政治経済	21. 社会生活と文化	21. 人文地理
22. 政治	22. 文化	22. 自然地理
23. 経済	23. 社会生活と文化	23. 人文地理
24. 政治経済	24. 文化	24. 自然地理
25. 政治	25. 社会生活と文化	25. 人文地理
26. 経済	26. 文化	26. 自然地理
27. 政治経済	27. 社会生活と文化	27. 人文地理
28. 政治	28. 文化	28. 自然地理
29. 経済	29. 社会生活と文化	29. 人文地理
30. 政治経済	30. 文化	30. 自然地理
31. 政治	31. 社会生活と文化	31. 人文地理
32. 経済	32. 文化	32. 自然地理
33. 政治経済	33. 社会生活と文化	33. 人文地理
34. 政治	34. 文化	34. 自然地理
35. 経済	35. 社会生活と文化	35. 人文地理
36. 政治経済	36. 文化	36. 自然地理
37. 政治	37. 社会生活と文化	37. 人文地理
38. 経済	38. 文化	38. 自然地理
39. 政治経済	39. 社会生活と文化	39. 人文地理
40. 政治	40. 文化	40. 自然地理
41. 経済	41. 社会生活と文化	41. 人文地理
42. 政治経済	42. 文化	42. 自然地理
43. 政治	43. 社会生活と文化	43. 人文地理
44. 経済	44. 文化	44. 自然地理
45. 政治経済	45. 社会生活と文化	45. 人文地理
46. 政治	46. 文化	46. 自然地理
47. 経済	47. 社会生活と文化	47. 人文地理
48. 政治経済	48. 文化	48. 自然地理
49. 政治	49. 社会生活と文化	49. 人文地理
50. 経済	50. 文化	50. 自然地理
51. 政治経済	51. 社会生活と文化	51. 人文地理
52. 政治	52. 文化	52. 自然地理
53. 経済	53. 社会生活と文化	53. 人文地理
54. 政治経済	54. 文化	54. 自然地理
55. 政治	55. 社会生活と文化	55. 人文地理
56. 経済	56. 文化	56. 自然地理
57. 政治経済	57. 社会生活と文化	57. 人文地理
58. 政治	58. 文化	58. 自然地理
59. 経済	59. 社会生活と文化	59. 人文地理
60. 政治経済	60. 文化	60. 自然地理
61. 政治	61. 社会生活と文化	61. 人文地理
62. 経済	62. 文化	62. 自然地理
63. 政治経済	63. 社会生活と文化	63. 人文地理
64. 政治	64. 文化	64. 自然地理
65. 経済	65. 社会生活と文化	65. 人文地理
66. 政治経済	66. 文化	66. 自然地理
67. 政治	67. 社会生活と文化	67. 人文地理
68. 経済	68. 文化	68. 自然地理
69. 政治経済	69. 社会生活と文化	69. 人文地理
70. 政治	70. 文化	70. 自然地理
71. 経済	71. 社会生活と文化	71. 人文地理
72. 政治経済	72. 文化	72. 自然地理
73. 政治	73. 社会生活と文化	73. 人文地理
74. 経済	74. 文化	74. 自然地理
75. 政治経済	75. 社会生活と文化	75. 人文地理
76. 政治	76. 文化	76. 自然地理
77. 経済	77. 社会生活と文化	77. 人文地理
78. 政治経済	78. 文化	78. 自然地理
79. 政治	79. 社会生活と文化	79. 人文地理
80. 経済	80. 文化	80. 自然地理
81. 政治経済	81. 社会生活と文化	81. 人文地理
82. 政治	82. 文化	82. 自然地理
83. 経済	83. 社会生活と文化	83. 人文地理
84. 政治経済	84. 文化	84. 自然地理
85. 政治	85. 社会生活と文化	85. 人文地理
86. 経済	86. 文化	86. 自然地理
87. 政治経済	87. 社会生活と文化	87. 人文地理
88. 政治	88. 文化	88. 自然地理
89. 経済	89. 社会生活と文化	89. 人文地理
90. 政治経済	90. 文化	90. 自然地理
91. 政治	91. 社会生活と文化	91. 人文地理
92. 経済	92. 文化	92. 自然地理
93. 政治経済	93. 社会生活と文化	93. 人文地理
94. 政治	94. 文化	94. 自然地理
95. 経済	95. 社会生活と文化	95. 人文地理
96. 政治経済	96. 文化	96. 自然地理
97. 政治	97. 社会生活と文化	97. 人文地理
98. 経済	98. 文化	98. 自然地理
99. 政治経済	99. 社会生活と文化	99. 人文地理
100. 政治	100. 文化	100. 自然地理

National Institute for Land and Infrastructure Management 18

東北の定期市

- ・秋田→米代川流域市場群、海岸部市場群、横手盆地市場群。三斉市、六斉市などの定期市。

[illegible]

National Institute for Land and Infrastructure Management 19

関東の定期市

- ・ 戦国時代町立てとしての「市」が発達。主に六斉市。たとえば北条氏。



National Institute for Land and Infrastructure Management 20

いくつかを北のほうから紹介します。これが岩手、青森で一戸から八戸の辺りにあります。六斎市ではなく三斎市、要は1、11、21、といった、月に三回という形で今でもあります。山形は昔あったが今はなくなっている。秋田は非常に盛んです。六斎市のあるところは大きく3つに分かれています。八郎潟付近の部分、米代川付近の部分、それから横手盆地部分ということでよく六斎市が開かれています。インターネットで調べてもこういう形で行われているということがわかります。新潟と同じくらい盛んだということが分かります。秋田に関する旅番組でも必ず六斎市も出て来るので注意して見ていただければと思います。

関東は昔はけっこう六斎市があったということです。どうしてあったかという、戦国時代、北条氏が街道と在郷町をしっかりと支配していたので市が発達したというふうに言われております。具体的には群馬県だと利根川上流と新潟に抜ける山、その里と山の接点に谷口集落があってそこに六斎市がけっこう盛んに立っていました。そしてそれぞれのところか

関東の定期市

- ・ 群馬→山と里の接点「谷口集落」。六斎市。特産物取引。衰退。
- ・ 埼玉→幕府直轄地、小藩多数のため「市」広く分散。江戸初期56カ所。衰退。



National Institute for Land and Infrastructure Management 21

らの特産物の取引が行われたということです。今は衰退してしまいました。埼玉県も結構多くて、地図で見るとこのような感じです。実際なんで、そうなったのかというと、幕府の直轄地があるとか、いろいろな小藩があり、それぞれのところで立てていたので各地に分散していたようです。

江戸の初めは 50 数カ所もあったけれども現在は衰退してしまっています。ときたま、六斎市をやっているというのをテレビで見たこともありますが、インターネットでも見つけられません。茨城もあつたようですがなくなった。千葉も利根川とか房総半島とかにも発達していた。現在では勝浦のほうにあるといったところでは。

関東の定期市

- ・ 茨城→大正期に消滅。
- ・ 千葉→水運要地、房総半島に六斎市発達。現在は房総半島のみにいくつか存続。



National Institute for Land and Infrastructure Management 22

愛知県三河ですが、インターネットでは見つかりませんでしたが、どうもあるようだというのが分かってきました。実は衣浦港のところに亀崎とか半田とかにもあります。去年名古屋行ったときにパンフレットを見ていたら半田の六斎市と書いてあったので、いまでも行われているというのが分かりました。

中部の定期市

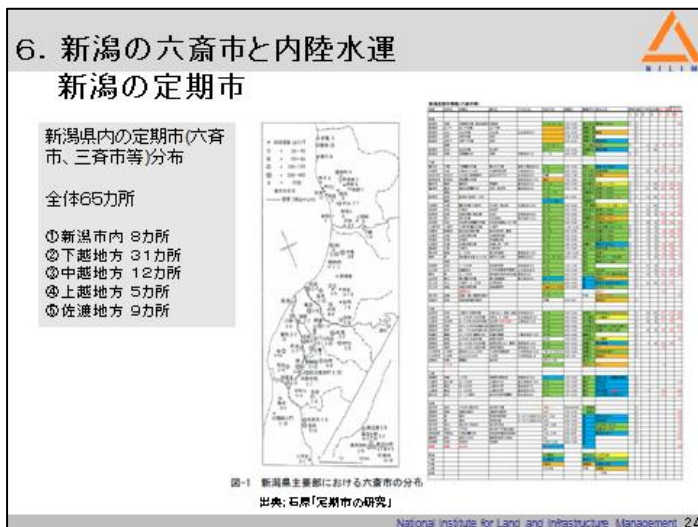
- ・ 愛知→三河地方に発達。現在も多数存続。
- ・ 三重→四日市等に存続。



図-1 三河西近辺の主要な朝市と夜市
(東海朝市・朝市クラブ、1996より抜粋・整理)

National Institute for Land and Infrastructure Management 23

新潟ですが、全体で六斎市、三斎市ということで 65 カ所



ぐらいあります。新潟市内（政令指定都市後の新潟市内）に8カ所、下越地域に31カ所、中越地方で12カ所、上越地方で5カ所、佐渡地方で9カ所あります。それぞれの細かいところはお配りしたものをみていただくと分かりますが、佐渡については六斎市というよりも三斎市ということで月に三日行われます。お配りした新潟県内

六斎市等一覧表（A4一枚）は、新潟、下越、中越、上越、佐渡について、先ほどの参考文献2つを基にまとめてあります。いつの日に行われるか？、近くの川は何川か？、いつごろからできたのか？、参考文献はどれなのか？、「みなと通信」第何号で掲載したか？、「みなと通信」で取材したとき何軒ぐらい店が出ていたか？、昭和50年には何軒ぐらいの店があったか？、大正5年には何軒ぐらいあったか？というふうな形でまとめています。精度はやや疑問なところもありますが、ザクツとしたところはとらえています。



実際どのような六斎市かということで写真をまじえて説明したいと思います。

巻町というところは新潟市内から信濃川の支流で西川が流れていて、途中で信濃川と合流しますが、弥彦山のふもとにある町であります。越後線の巻町という駅があります。昔はこの海側に原発

を作ろうとして中止になったところでもあります。ここでは五十の市ということで少なくとも江戸時代の中ごろから行われているというわけです。「越佐みなと通信」の調べでは50軒ぐらい。昭和50年ぐらいでは150軒ぐらい店が立っていたということです。市というのはこのような雰囲気でございまして、テントがあってその中でいろいろな人が売っています。だいたいこういう方、車

で来ていますし、立派なテントを持っていますし、野菜もけっこう立派なものがあります。本当の青果市場で仕入れてきてここで売るといふ形の市場です。八百屋が自分の店舗を持たないで市場のところで売るといふ形のものになっております。こちらの方では魚も売ります。これは漁港か水産市場から持ってきて小売りしています。基本的に野菜とか魚が多い。こんな形で 50 店舗ぐらいあり、

晴れた日に行くと賑やかです。お客さんをみると地元のおばさんとかが多いです。私がここを歩いていた時に外国人がブラブラしていたり、スーツを着た人もいました。ときどきはそういう人もいます。この店は八百屋ですが子供もつれてきて売っています。これが市場の状況でございます。

新潟六斎市の紹介－巻－



- ・野菜、季節もの。
- ・春のため種も。
- ・あまり知らない野菜も。
- ・とっくり芋、ずんぐり？
- ・安い。大根 100円。



National Institute for Land and Infrastructure Management 26

新潟六斎市の紹介－巻－



- ・服、茶碗もあり。
- ・出店のための場所番号。
- ・近くには川が、西川。
- ・川へは商店街が。



National Institute for Land and Infrastructure Management 27

どんなものを売っているかということ、これはしいたけ、弥彦のしいたけ大盛 500 円とかで売っている。大根が 100 円ということで結構安いものも売っている。ちょうどこれは春の時期だったので、野菜の種を売る店も出ている。それからスーパーでは見ないような変わった季節もの、「とっくりイモ」とか「ずんぐり」

とかいろいろなものが買えます。では実際野菜とかそういうものだけかなと思いますとこんなものも売っています。服とか茶碗も売る。よくいう輪島などの朝市というよりも、地元のスーパーマーケットが屋内の店ではなくて、屋外で売っているようなかんじです。実際の店を立てるのにこういうふう道のとこに番号が書いてあって、昔はこの番号のところに立てるといふふうになって

いたのだろうなと思います。この場所は近くに西川が流れていて、平行した商店街のところに連なっているということです。



同じように吉田という町ですが、西川沿いに、巻町のとなりにあり、巻町は五十の市だったのですが、ここは一六の市になっております。近い町では同じ日に市は立たない。ちなみに新潟でこの6月に「みなとのネットワーク・フォーラム10周年」というのがあり、「みなとピア」の中に入ったと思いますが「みなとピア」に六斎市の展

示があります。とにかく同じ日に近隣では市をやらない。いってみれば1～5まで1、2、3、4、5と一つずつずれていくということになります。その理由は、店を出す近在の人が週休2日ぐらいで毎日どこかで商売ができるというシステムになっているようです。ここは、西川沿いいうところで、40店舗あります。ちょうど市が立っていないときだったのですが、ここに看板があります。「市の日はこちらに車を駐車しないでください。」となっていて、この辺りに市が立つのだとわかります。こちらには市場の管理事務所があります。市のお金を取るような人がいるのだろうと思われます。近くを川が流れておりまして、川のそばにたぶん料亭だったのだろうと思いますが、三階建の木造の立派な建物もあるということで、川を交通手段としていたころの名残であろうと思います。



新潟から新津に行くところに亀田(亀田郷)という町がありまして、新潟は昔は泥沼というか歩いて行けるような田んぼではなく、首まで泥田の中に沈んでつかるといった。ここは日本で最初に土地改良区ができたようなところで、今でも、「亀田郷土地改良区」という立派な組織

があります。そこで土地を売ってお金を儲けるというようなことをやっているすごいビジネスもしている、亀田という町です。亀田のあられおせんべいがあるところでもあります。ここにも六斎市があります。ここは三九の市ということで平日 100 店舗、昭和 50 年ごろには 200 店舗ぐらいあったということです。ここは 1700 年以前からあったそうです。ここももともと、新潟に栗の木川という川があり、この川は亀田の町中まで来て、亀田に船溜まりがあつて米とか物資を新潟湊まで運んだ。そこに六斎市ができました。ここには亀田市場の由来という看板も立っていきまして、やはりそれぞれの町々で市場というものに対しての親しみというか価値を持っているのがわかります。以前はこの表通りでやっていたようですが、ここは道路だからここでやることは許さんということで一本裏の道で行っています。ここも道に何番、何番という枠を作っています。



次にこれは葛塚市です。これが新潟の六斎市の中で一番賑やかなところでたぶん行くのだったらこの葛塚市に行くのが一番おすすめです。いまでも 150 店舗ぐらいあるということです。「ここで買い物してね葛塚市」という看板も出ていて、しっかりしたものになっています。実際の中は、こんな感じで屋台も出るようで非常に賑やかです。買い物をする人は普通のスーパーと同じでこの辺にカートが置いてあり買い物ができるような仕組みになっています。この辺で魚を売っている。店は商売人ばかりではなくてパラソルの下で農家から来て売っている人もいます。今問題なのはこのような農家のおばさんが高齢化し、売りに来る人も減ってきている原因かなと思



います。車が通っていますがここが主要道です。そこから枝道としてちゃんと六斎市のための場所を昔は豊栄市だったのですが今は新潟市の方で確保しています。

昔は新井郷川の近くで市が立てられていた。川の近くの大通りで市が開かれていましたが、道路でやるのはダメだということで、さらにもうちょっと神社に近いところになりました。それでも問題があり、今はここに落ち着いたというわけです。ここにある神社が開市神社ということで市場の神社が中にあります。

新潟六斎市の紹介－長岡－

五・十の市、三・八の市 5/10 3/8 内川(信濃川) 60店舗(150) 明治末



- ・長岡市街地にも六斎市。
- ・2か所で開催。
- ・明治末期、戦後に開設。
- ・広い道路に野菜等販売。

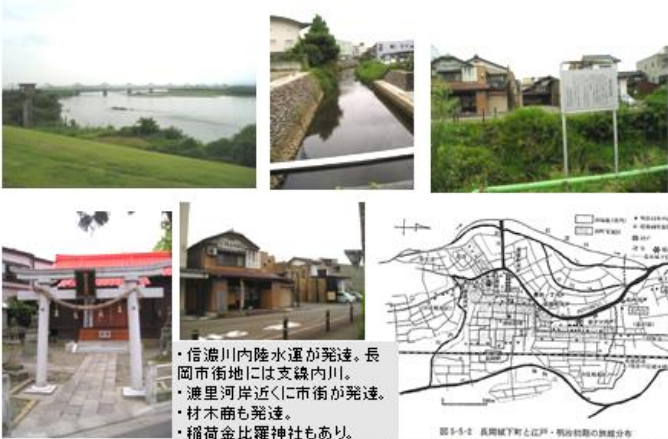


図-1 新潟県主要部における六斎市の分布²⁾

National Institute for Land and Infrastructure Management 32

これは長岡の市場で長岡には六斎市が2つあって五十の市と三八の市というものがあります。できたのが明治の末ということでここは昔から城下町であったということで町の中にこういう形で六斎市が立ちます。長岡は地図でいきますと信濃川があって、長岡駅があって、信濃川から内川という川がありここで昔から人とか物が内陸水運で運ばれました。ここに渡里河岸というのがあり木材とか人を上げました。このあたりを中心に今でも市が立つというわけです。神社としては稲荷金毘羅社というのがあります。

新潟六斎市の紹介－長岡－



- ・信濃川内陸水運が発達。長岡市街地には支線内川。
- ・渡里河岸近くに市街が発達。
- ・材木商も発達。
- ・稲荷金比羅神社もあり。



図-2-5-6 長岡市街地と内川・新井郷川の敷設状況

出典：石原 1995「越後の尾根市(北陸道の展開と変遷)」

National Institute for Land and Infrastructure Management 33

新潟六斎市の紹介－高田(上越市)－

五・十の市、三・八の市 5/10 3/8 関川 大正9年、明治末



- ・一つの道路を2つの位置に分けて開催。
- ・観光パンフにも積極的に掲載。
- ・野菜等豊富。
- ・まんじゅうなどお菓子屋台もあり。
- ・陸軍の要請により開催。
- ・市の機柱あり。

National Institute for Land and Infrastructure Management 34

新潟六斎市の紹介－直江津(上越市)－

三・八の市 5/10 3/8 関川 明治44年



- ・地元密着型の位置。
- ・新しい。
- ・季節の野菜、規模は小さい。

National Institute for Land and Infrastructure Management 35

内陸水運の状況

近世初期の沿岸・内陸水運網
①佐渡、沿岸航路が発達。
②信濃川、阿賀野川、関川、荒川、加治川等河川に内陸水運網が発達

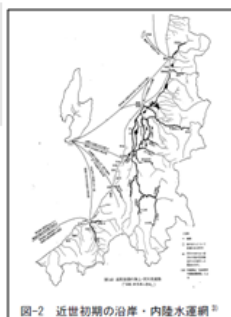


図-2 近世初期の沿岸・内陸水運網



図5-5-1 近世の信濃川・阿賀野川水運 (山崎久雄による)

National Institute for Land and Infrastructure Management 36

これは上越の高田というところで、ここはパンフレットでも非常に市場（六斎市）を宣伝しています。1キロぐらいの道を半分に分けて五十の市と三八の市というふうにしています。ここは観光客もいるということで饅頭を屋台で売っています。ここには昔からあったのではなくて高田には旧陸軍があって、今は自衛隊もありますが、物が買えるように市場でもやれと軍がいったのが始まりで、できたのが大正9年とか明治の末とか言われております。ですからこの成り立ちというのは他のところとは違います。四九の市という石碑もあります。

直江津港にもあったのですが、ちょうど雨が降っていて寒くて寂しいかんじですが、このようにして立ちます。上越は昔の城下町ということもあってこういう市が発達していません。どういうものを売っているかというと、ふきのとう、銀杏とか結構安そうです。300円とか200円とかけっこう安いんですね。農家のおばさんのような人が売っています。

内陸水運との関係はこのようになっています。

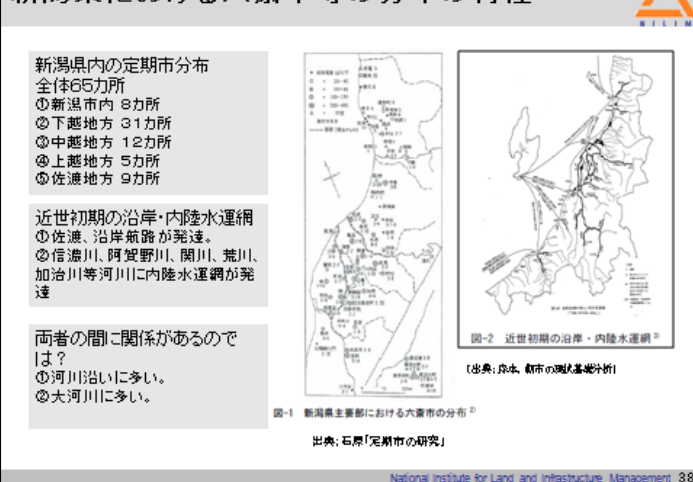
内陸水運の話もついでに

内陸水運の状況－津川(阿賀野川)－



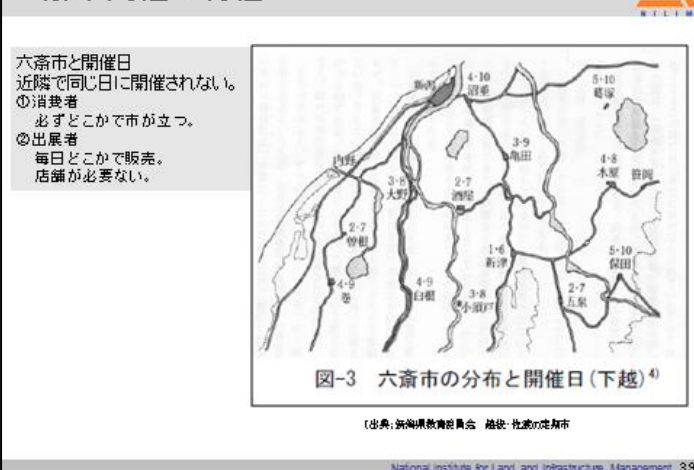
しますと、これはさきほどお話しした阿賀野川上流の津川で、鉄道ができるまではこういう内陸水運で輸送していた。ここまで船で持ってきて、あとは人馬で持って行ったのだと思います。けっこうしっかりした津川河港跡という立て看板も立っていて、昔造った施設がいまでも残っています。

新潟県における六斎市等の分布の特性



このようにして六斎市の分布で 65 カ所あって、内陸水運が発達していて河川沿いに多いなということがわかります。六斎市の開催の特性ということで、ちょっと見にくいですがあるところを中心にしてみると 1、2、3、4、5 とか 1、2、3、とかになっていて、同じ日には開催されないということです。買う人も毎日どこかに行けるのかと思うのですが、たぶん出店する人の方が店舗がいらない分、経費もかからないのでいいのだろうと思います。

六斎市開催の特性



これでは分析が足りないものでちょっと分析してみようかなと思います。この定期市が川とか海に接している割合ということで調べると、大体 9 割は川なり海に面した町にある。さらにその中で川に面している割合が 8 割

六斎市の分布と内陸水運との関係①

定期市が存在する立地条件

- ・ほぼ全てが河川・海に面する。
- ・さらに河川沿いが多い。
- ・新潟県を河口・海とする信濃川・阿賀野川水系沿いに存在。

定期市の形態

- ・3/4は六斎市。
- ・下越、中越では、その形態が六斎市。新潟は毎日。佐渡は三斎市。

定期市の成立時期

- ・2/3は明治以前から。
- ・下越、六斎市の8割以上が江戸時代及びそれ以前の成立であり、現在も存続。
- ・上越・佐渡は新しい。上越は軍の要請。

地域	全体 箇所	河川・海 箇所	河川・海 割合	全体 箇所	河川・海 箇所	河川・海 割合	六斎市 箇所	河川・海 箇所	河川・海 割合	六斎市 箇所	河川・海 割合
新潟	8	8	100%	8	8	100%	3	3	38%	2	67%
下越	32	29	91%	28	26	93%	24	24	86%	18	75%
中越	13	13	100%	13	13	100%	10	10	77%	3	30%
上越	5	5	100%	5	5	100%	4	4	80%	0	0%
佐渡	10	9	90%	2	2	22%	0	0	0%	23	58%
	68	64	94%	56	56	100%	41	41	73%	23	56%

100-75% 74-50% 49-25%

National Institute for Land and Infrastructure Management 40

になっています。その中で六斎市の割合がどのくらいあるかというと約 7 割あります。新潟市内はどちらかというと毎日立つ市が多い。下越、中越、上越は六斎市が多い。佐渡については川もないし三斎市である。いつごろからできている市なのかといいますと、下越を見ますと 7 割、8 割近くが江戸時代もしくはその前からあります。中越は 3 割くらい、新潟市内は 6 割くらい、上越は明治、大正期でけっこう遅い時期にできている。基本的に在郷町・内陸水運というものの発展とともに六斎市はできて今も続いているというふうなことが分かります。

さきほどの葛塚市というのを見たときに、今の葛塚市はこの辺④にあるわけです。さきほど新井郷川の写真を撮ったのはこの辺①でしてこの辺で最初に市が立った。この水運が廃れていくと市のほう②③にどんどん寄っていった。もう道路でやるのはやめてくれということで結局こういうところに落ち着いたということです。

新潟の六斎市は 60 くらいあるんですが、勝手に四つに分類してみました。見たところ、①現在も活発に工夫をし

六斎市と内陸水運との関係分析② 葛塚市



図-4 葛塚市の開催場所の変遷と河川⁵⁾

(出典:新潟県教育委員会 編集:佐渡の歴史)

葛塚市(5/10の市)

- ①神社の参道の河川沿いに立地。
- ②内陸水運衰退。商店発達。道路に展開。
- ③道路管理問題から移転。



National Institute for Land and Infrastructure Management 41

新潟の六斎市の現状分類と課題



⑤葛塚(5-10)
・今でも盛ん。
・看板、カートもあり。

新潟の六斎市の課題
⑤が顕著
今後の課題
・現状の総合的調査。
・存続・活性化。

表-2 新潟県における現状から見た六斎市の類型

① 現在も工夫をしつつ活発な六斎市 (葛塚)
② 活発ではあるが高齢化が進んでいる六斎市 (亀田)
③ 交通変化 (内陸水運の衰退) の影響を大きく受けた六斎市 (大野)
④ 商業活動の変化に大きく影響された六斎市 (三条)



⑥亀田(3-9)
・高齢者目立つ。



⑦大野(3-8)
・河川沿い。
・鉄道なし。



⑧三条(5-10)(2-7)
・近隣に大型複合店舗。
・中心市街地空間化。

National Institute for Land and Infrastructure Management 42

ながら行っているというのはさきほど説明した葛塚の六斎市、②一方活発ではあるが、店を出す人も買い物に出てきている人も年を取っているなというのが亀田の市。③昔は内陸水運の拠点であって鉄道もあったが、それもなくなってひどく寂れたなあというところもあります。④それから最近一番大きいのはジャスコとかイオンとかが出てきて、中心市街地自体もそれでアウトになってきている所は多いのですが、六斎市自体も寂れてきて問題かなと思っています。これを新潟で今後どうやって存続させるか重要だと思うのと、この六斎市は 60 何力所あるのですが、もうちょっと本格的に調べてもらう必要があるのではないかと考えております。これは今すぐにでも行うべき課題だと思います。

7. 地域での振興としての六斎市 地域活性化としての六斎市の活用状況

他地域六斎市活用状況

- ①中山道中津川宿 平成20年より毎月第一日曜(江戸時代 3・8の市)
- ②奈良今井町 平成8年より毎年5月
- ③小田原城北条六斎市 5月に開催
- ④日光今市宿六斎市 平成17年より毎月第3土曜

課題

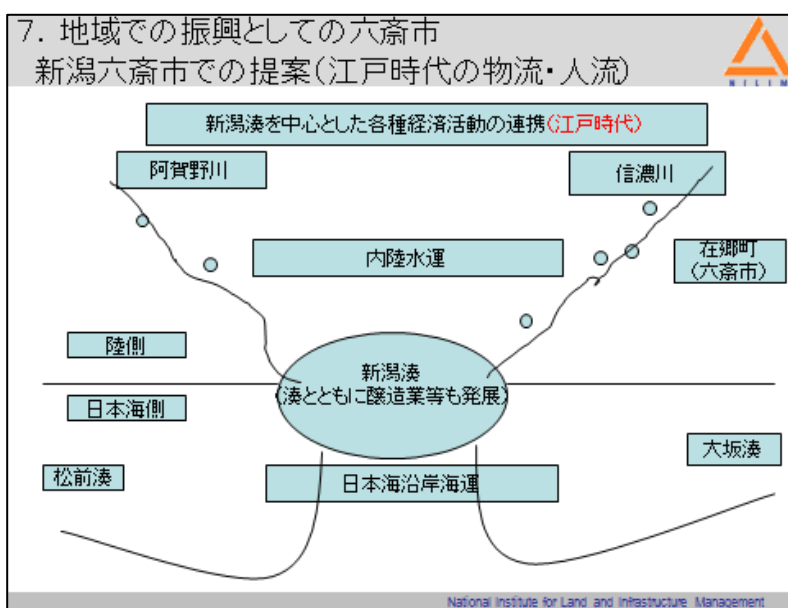
- ・本来の「六斎市」を十分考慮しているか？
- ・単なる町おこし、中心市街地活性化の手段？



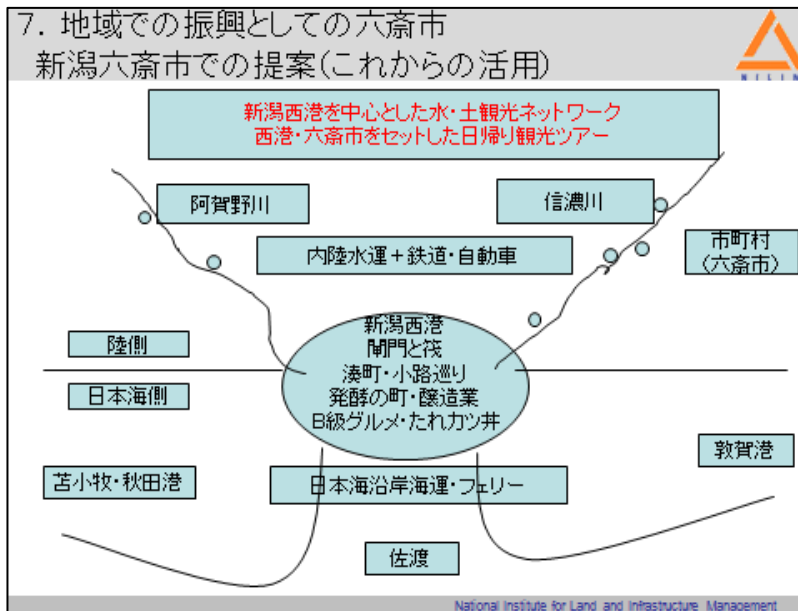
National Institute for Land and Infrastructure Management 43

では今、六斎市はどのようにして、全国でまちおこしとして行われているかということについていろいろ調べてみると、代表的なところで中山道中津川の六斎市は毎月第一日曜日にやっている。奈良今井町の六斎市、これは 5 月だけ。北条六斎市、これも 5 月だけ。日光六斎市は第三土曜日。名前と実態が合っていない。そもそも自分のところに六斎市があったのを認識しながら行っているのか疑問に思っております。

では新潟で今後どのように、地域振興に役立てればよいのかというのに勝手な案を考えました。もともと新潟というのは、新潟湊を中心に北海道、



大阪という日本海海運、それから信濃川を中心とした内陸水運、それに在郷町の六斎市ができたというものです。



海運業に合わせて酒、焼酎業も発展したということです。これを現代風に直して、六斎市でやればどうかなあと思うわけです。新潟西港では「閘門と筏下りツアー」とか「湊町、小路めぐり」とか、「発酵の町醸造群」、「B級グルメタレカツ丼」といったところで、内陸沿岸海運では苦小牧、秋田、敦賀、佐渡への船、内陸では船で行けるところは限られているのでバス、鉄道などで「新潟港と六斎市を結んで水土観光ネットワークツアー」とか、こういうふうにやっていけばいいのではないかな。これも新潟市に何度も提案しましたがなかなかできないなあと思っています。

賀、佐渡への船、内陸では船で行けるところは限られているのでバス、鉄道などで「新潟港と六斎市を結んで水土観光ネットワークツアー」とか、こういうふうにやっていけばいいのではないかな。これも新潟市に何度も提案しましたがなかなかできないなあと思っています。

8. まとめ(定期市を地域振興手段とするために)

六斎市の現状

- ・全国の六斎市は戦後特に近年急激に減少し一部地域に限定。
- ・新潟、秋田、南部地域(三斎市)、三河、房総半島に限定。特に、新潟県においては現在でも盛ん。

新潟六斎市の分析

- ・六斎市は沿岸海運、内陸水運の発達と大きく関係。特に、信濃川、阿賀野川水系。
- ・現在の賑わい度で4つに分類。高齢化、公害商業施設の影響大。存続・活性化が課題。
- ・生活密着と観光等地域振興のための「六斎市」の融合が課題。
- ・観光として、内陸船旅、新潟湊との連携も必要。

現代版「六斎市」

- ・全国で町おこしとしての「六斎市」も見られる。
- ・本来の六斎市とはかけ離れる。観光定期市に、単なるネーミング。
- ・「六斎市」の本来の意味合いとの整合性が課題。

今後の研究の課題(特に新潟において)

- ・新潟六斎市の詳細調査。現存他地域「六斎市」の現地調査。
- ・利用者・出展者のヒアリング。
- ・六斎市存続・活性化案の提案。

National Institute for Land and Infrastructure Management 46

まとめということで、六斎市の現状、分析、現在版六斎市ということですが、とにかく今後の課題ということで、やはり一斉に調べてデータを集めるということが全くここ 30 年ぐらいやられていないということで、これを速やかに行うことが必要です。誰が行うか、お金もかかるし、

出店者ヒアリングも必要だし、どのようにPRしていくかなというところが重要だと思っています。

最後に、実は横須賀にも来てくださいということで、横須賀にいるとこのような風景が見えますということで、これは昔の造船所の横須賀のガントリーで、今はダイエーになっていますが、またちかくはヴェルニー公園になっています。海上自衛隊の南極観測船がいたり最新型の船が見られます。一方これは観音崎にある横須賀美術館ですが、そこから浦賀水道を見ると、こんな形で船が見えるいいところです。是非横須賀にいらしてください。御静聴ありがとうございました。

ご清聴ありがとうございました

